

太宰治 生誕100年を迎えて

齋藤 三千政¹⁾

1. はじめに

小稿は、平成21年9月26日に開催した本学の「第1回公開講座」で、「太宰治 生誕100年を迎えて」のタイトルで発表したものの概要である。紙幅の都合上、その一部だけの紹介にとどめたい。

周知のとおり、2009（平成21）年6月19日は、太宰治が誕生してから100年目を迎えるという節目の年であった。その記念すべき日を中心に実施された「記念イベント」の状況は、まさに目白押しであったというほかない。県内はむろん、全国各地で多彩な関連行事が開催されたのである。

この生誕100年記念イベントの企画は、すでに前年度から開始されていた。すなわち、平成20年4月30日、五所川原市において、青森県、西北五市町村、観光協会などの官民共催の「太宰治生誕一〇〇年記念津軽地域観光振興協議会」の発足会が開催され、ここが実質的なスタートであった。つまり、次年度の生誕100年に向けて、本年から太宰治の作品『津軽』を柱にして、津軽地域の観光振興を図るための諸事業を展開しようというのがその主たる目的であった。

2. 記念イベントを中心に

それにしても、新聞やテレビなどのマスコミの報道はすさまじかった。6月19日の太宰治の生誕100年に関わるさまざまな記念事業を、連日のように紹介したのである。たとえば、作品『津軽』を基本資料として「公式テキスト」を作成し、第一回「太宰治検定」の実施。さらに『斜陽』『ヴィヨンの妻』『パンドラの匣』『人間失格』などの太宰作品の映画化、あるいは上映の予定が、逐一報道されるという状況であった。また、太宰治の等身大の銅像が完成し、それは太宰一人の銅像としては全国で初めてだという。

それだけではない。没後60年以上過ぎても、いまもなお読み継がれている太宰文学の魅力伝えるために、地元紙は「音読コーナー」を紙面に設け、太宰治の作品

『津軽』を連載。さらに、津軽平野を走る鉄道の駅舎では太宰作品の朗読会も開かれていて、観光客に大変好評であったと伝えられている。太宰の作品は、朗読するときはその魅力を十分に発揮する。つまり、太宰の作品は〈語り口〉がとてすばらしいから喜ばれるのである。文章のうまさ、といってもいいかもしれない。

ところで、弘前市出身の文芸評論家・三浦雅士は太宰文学の隆盛には、おなじく文芸評論家・奥野健男の『太宰治論』の果たした力が与って大きかったと述べている。

その奥野健男が、20年まえの太宰治没後40年記念パンフレットに「なぜ今日、太宰治展か」と題して、太宰文学の魅力はその語り口にあるとし、「あなた、君よ、読者よという語りかけのかたちで活字を読んでも耳から心に入ってくる」というのだ。さらに「稲作文化以前の縄文時代の中核だった津軽に産れ、育ったということが太宰文学のキーワードではないか。パラドシカルであるが、もっとも土俗的な文学者からもっともインターナショナルな、普遍的な文学がうまれる」という。すなわち、奥野健男はこの四十年展を、太宰治の「生まれ育った津軽という東北の辺土から太宰治文学をもう一度味わって欲しい」という観点から計画した。そこから話体を中心とする、ほんとうの小説が復活し、さかえて行くのではないかと結ぶ。キーワードはまさに〈津軽〉そのものだ。また、奥野健男はこうもいっている。興味深い発言だ。

——文学者井上靖氏が、もし日本の文学者から文学オリンピックの代表を一人えらぶとすれば、漱石でも川端康成でもなく、ちょっと小さいが太宰治だね、と語った言葉も忘れ難い。……

3. 太宰文学の魅力の秘密

太宰の文章の特徴について、平成21年6月20日の「記念フォーラム」で、直木賞作家の長部日出雄が基調講演を行った。まことに示唆に富んだお話で感銘を受けた。この講演についてもマスコミはすぐに反応した。翌日の21日付の新聞の見出しがおもしろい。「津軽弁は太宰文

1) 弘前医療福祉大学保健学部

学の母」というのである。

つまり、こういうことだ。長部日出雄は太宰には〈五人の母〉があるという。実母の夕子はいうまでもないが、津軽の昔噺を毎夜、太宰に添い寝しながら聞かせた叔母きゑ、太宰に本を読むことを教えた子守兼家庭教師のタケ。さらに、太宰と見合い結婚し、それを機に太宰の文学を飛躍的に進歩させた石原美知子夫人、そして〈五人目の母〉が「津軽弁」だということである。長部日出雄は講演で太宰の作品「雀こ」の冒頭の一節「長え長え昔噺、知らへがな」を紹介して、次のようにいう。

——この同一のフレーズを、まるで子守唄のように、あるいは呪文のように、眠気に誘われた子が完全に目を閉じて寝息を立てるまで、どこまでも際限なく繰り返す。こうして幼い修治にとって、日常の会話とは別の次元で語られる言葉は、まず旋律と韻律を帯びた詩か音楽として、あるいは呪力を籠められた言霊として、耳元に繰り返し囁かれ、風のない夜の雪のように、しんしんと夢の世界の底に降り積もって行った（記念公演パンフレット所収の「講演要旨」から）。……

すなわち、太宰治と太宰文学の根幹を形成したものが、叔母きゑが毎夜太宰に添い寝をしながら聞かせた「津軽の昔噺」であるというだ。だとすれば叔母きゑの存在はまことに大きいといわざるを得ない。なぜなら「文字通り母語である津軽弁こそが文学的な故郷」ということになるからである。つまり、新聞の見出しを借りるならば、〈津軽弁は太宰文学の母〉ということだ。

太宰治は、周知のとおり「二十世紀旗手」を自認した。現在の太宰文学の隆盛をみると、太宰のその予言が、みごとに的中したことになる。そして、いま生誕100年。太宰文学は世紀を超えて、さらに読み継がれていくことはまちがいない。その隆盛の秘密をまことにわかりやすく、ユーモアたっぷりに、約八〇〇人の聴衆に語りかけた長部日出雄の〈津軽色ゆたかな解説〉もまた、きっと長く語り継がれるにちがいない。

4. 太宰の代表作『津軽』について

津島美知子さんの名著『回想の太宰治』（平成20年3月 講談社文芸文庫）所収の年譜によると「五月、小山書店から『津軽』を執筆依頼され、六月まで津軽地方を旅行、一二月刊行」とある。太宰に依頼したのは小山書店編集員の加納正吉と思われるが、それにしても、当時太平洋の日本軍守備隊が連合軍によって次々に撃破されるなど、日本は窮地に追い込まれていたときだ。いよいよ本土決戦も近い、という危機感に包まれていたに違いない。

そのような状況下で、約3週間にわたって津軽を取材

旅行し、11月に太宰が『津軽』を刊行した事実は、まことに重い意味を持つ。そもそも、この「新風土記叢書」の企画自体が奇跡のようなものだ。8月の国民総武装の閣議決定、10月に神風特別攻撃隊が編成されたことを考えれば、そう思わざるを得ない。

「いやもう私たちにとっては、ひどい時代であった」（「十五年間」）にもかかわらず、太宰は困難をきわめたであろう取材を終えて三鷹に戻る。しかも美知子さんの前書によれば「予定よりも一週間延びて六月五日、二十五日間の旅行を終って日焦けして元気に帰宅した」というのだ。強靱な太宰を想像することは、かなりむずかしいことが、美知子さんは、このひどい時代に「太宰はじつによく動き、よく書いた」と激賞している。太宰もまたこのころの創作活動を「その時に死んでも、私は日本の作家としてかなりの仕事を残したと言われてもいいと思った。他の人たちは、だらしなかった」（前掲書）と自負している。

昭和19年5月12日、太宰は「リュックサックを背に、弁当水筒持参で」三鷹の自宅を出発した。作中で「このたびの津軽旅行は、私にとって、なかなか重大な事件であったと言わざるを得ない」と述べている。重大な事件、とは穏やかでないが、それは、太宰が長いあいだ故郷に対して愛憎の念を抱いていたことと無縁ではなかったはずだ。すなわち、故郷に対するこの二律背反の感覚を抱く自分とは、いったい何ものなのか。そのことを見極める、つまりこの旅は太宰治にとって、自己確認の旅でもあったともいえる。

——こんどの旅に依って、私をもういちど、その津島のオズカスに還元させようという企画も、私に無いわけではなかったのである。都会人としての私に不安を感じて、津軽人としての私をつかもうとする念願である。言いかたを変えれば、津軽人とは、どんなものであったか、それを見極めたくて旅に出たのだ。私の生きかたの手本とすべき純粋の津軽人を捜し当てたくて津軽へ来たのだ。そうして私は、実に容易に、随所に於いてそれを発見した。……

繰り返すが、この旅は太宰の津軽人としての〈自己確認〉を試みた旅であり、「実に容易に、随所に於いて」所期の目的を果たすことができたということである。太宰はこの旅行で「忘れ得ぬ人」たちに会うことを強く望んだと考える。その人たちとの「心と人の心の触れ合い」を描ききったことによって、この作品は単なる〈風土記〉を超えて〈人間愛〉という普遍性を獲得したのではないか。

その象徴的なシーンが、30年ぶりに「たけ」と再開するクライマックスのラストシーンだ。大学の卒論発表会のとき、このシーンを涙ながらに読んだ女子学生がいたことを、いまでもはっきりと記憶している。太宰治の

最高の筆力、文章力、すなわち〈語り口〉のうまさと鮮やかさが十全に発揮された、日本文学史上に燦然と輝く名場面ではないか、そう確信している。

太宰がこの〈津軽旅行〉で「結局、私がこの旅行で見つけたものは『津軽のつたなさ』というものであった。拙劣さである。不器用さである。文化の表現方法の無い戸惑いである。私はまた、自分自身にもそれを感じた。けれども同時に私は、それに健康を感じた。(中略)私は、自分の血の中の純粹の津軽気質に、自信に似たものを感じて帰京したのである。つまり私は、津軽には文化なんでもものは無く、したがって、津軽人の私も少しも文化人で無かったという事を発見してせいせいしたのである。それ以後の私の作品は、少し変わったような気がする。私は『津軽』という旅行記みたいな長篇小説を発表した。その次には『新釈諸国噺』という短篇集を出版した。そうして、その次に、『惜別』という魯迅の日本留学時代の事を題材にした長篇と、『お伽草紙』という短篇集を作り上げた。その時に死んでも、私は日本の作家としてかなり仕事をしたと言われてもいいと思った。他の人たちは、だらしなかった」と断じている。

太宰の作品群のなかで、この『津軽』を高く評価する文芸評論家・作家が多い。たとえば、太宰の友人で評論家の亀井勝一郎は「彼の本質を一番よくあらわしているのは『津軽』である。私は全作品の中から何か一篇だけ選べと云われるなら、この作品を挙げたい」といっているほどだ。

また、太宰と同年生まれで、同様に生誕100年を迎える親友の直木賞作家の今官一が著書『わが友 太宰治』(平成4年6月 津軽書房刊)のなかで「なによりもまず、小説『津軽』を、太宰小説の最高峰にすえようという、在来からの私の所論」を展開していると述べている。

さらに、長部日出雄は岩波文庫の解説文をこう結んだ。

——太宰治はフィクションの天才でした。それを鮮やかに証明しているのが『津軽』です。

太宰の師であった佐藤春夫は、『稀有の天才』と題した追想の文章で、『津軽』についてこう述べました。

「他のすべての作品は全部抹殺してしまってもこの一作さえあれば彼は不朽の作家の一人だと云えるであろう」

これにばくは、太宰治がわが国の文学史上最高の喜劇作家であったことを示す『お伽草紙』を加えたいとおもいますが、『津軽』がそれと双璧をなす傑作であることには、全く疑いがありません。……

5. むすびに

それにしても、100年を経てもいまなお読み継がれる、いや、ますます隆盛を誇る太宰文学の魅力とは、いった

いなんだろうか。むろん、その魅力を一言で要約することは不可能に近い。なぜなら、すべての作品がその太宰文学のさまざまな魅力を内蔵しているといえるからだ。

ところで、平成20年6月19日の「太宰治生誕を祝う会」の席上で、つまり生誕100年の前年のことだが、その席上で津島園子さんがこう話した。来年は太宰治の生誕100年を迎える。今年も多くのイベントが開かれているが、それ以上にたくさんの行事が予定されている。でも、イベントだけでなく、その100年を機に、太宰作品を多くの人たちに読んでいただきたい、という趣旨のあいさつであった。

そのお話を聞きながら、だいぶ以前のことになるが、園子さんが「太宰が死んだとき、3年も経てば太宰の作品は消えるだろう」と太宰の周辺の人たちが話していた、ということを講演会で触れたことがあった。

今日の太宰文学の隆盛からすれば、その周辺の人たちの評価はまったく信じられないことだが、そうではないことを、つまり、周辺の編集者や営業マンたちがそういっていたことを、じつは今官一が前掲書で証言しているのである。

——『なあに、太宰ブームも五年間ですよ』と、その社の営業人はいった。センセーショナルな作品の版權を、一つだけ貰っておけば商売は成り立つ。なにもかも背負いこんで、重荷にすることははないという、いい分であった。それか、あらぬか、その作品は、戦後のベストセラーとなった……

さらに衝撃的なのは、太宰のお通夜の席で、出版權の話があったとき「出版など心にもないほど、打ちしおれて、他の社の人たちの申し出を、うわのそらで聞いていた、古田さん」がいったことばだ。

——私は、なんでも結構です。太宰さんの本を、一冊でも多く、みなさんが出して下されば。文句はありません。……

こういう人がいたから、太宰文学の今日の隆盛があるのかもしれない。「古田さん」とは、筑摩書房を創立した古田晁のことである。古田は太宰を高く評価し、太宰もまた古田のことをもっとも信頼していたという。

それにしても、太宰治の親友として、またライバルとしての今官一の存在は大きいといわざるを得ない。今官一は太宰が心中した十日後にこう記しているのだ。今官一は太宰治の最大の理解者であった。

——ほんとうに、世界でも、得がたい芸術家の一人でした。津軽は、彼の故郷にふさわしく絶対に、彼に対して、礼を失してはなりません。……